

未破裂脳動脈瘤に対する脳ドックの効用 (受診者の年代別検討)

高橋英孝、白昌善、吉田勝美 [聖マリアンナ医大・予防医学]

伊津野孝 [東邦大・医・衛生]

杉森裕樹 [昭和大・医・衛生]

宮川路子 [慶應大・医・衛生公衛]

1. 目的

MRAによる脳ドックの効用について年代別に医学判断学的評価を行うことにより、**勧奨受診年齢の設定**を目的とした。

2. 対象と方法

100,000人がMRAによる脳ドックを受診した場合と受診しなかった場合の樹状図を作成した。脳動脈瘤有病率と未破裂脳動脈瘤生涯破裂率を年代毎(30-49歳、50-59歳、60-69歳)に設定し、脳ドック受診の有無による死亡者数、救命数および救命者の質を考慮した効用値の比較を行い、受診者の年代別に感度分析を行った。

3. 結果および考察

脳ドック受診時に脳動脈瘤保有者で救命される者の数と効用値は常に非受診時を上回っていたが、高齢になるにつれて差が増加した。死亡者数について、脳ドック受診時が非受診時を下回るための条件は、30-49歳でMRAの感度が75.8%以上、特異度が76.6%以上、脳血管撮影死亡率が0.09%以下、50-59歳でMRAの感度が58.8%以上、特異度が69.9%以上、脳血管撮影死亡率が0.12%以下、60-69歳でMRAの感度が73.9%以上、特異度が76.0%以上、脳血管撮影死亡率が0.10%以下であった。一般的な脳ドックの医療レベルにおいて、この基準を満たすと思われるのは**50-59歳**であり、この年代を受診勧奨年齢にすべきであると考えられた。